

9月 月例会 報告

【日 時】令和 8年 9月26日 (土曜日) 13時から17時

【会 場】中央区・人形町区民館 参加者 12名 リモート参加 6名

第一部 【勉強会と懇談会】

(1) 研究発表： 「「世界文化遺産/飛鳥・藤原の宮都」の宿題」 新庄宗昭氏

1. 説明の趣旨：「飛鳥浄御原宮は明日香村岡の台地にはない」を他力本願でとどめを刺す事

2. 発表項目：①飛鳥宮には律令宮殿のコア・内郭が不自然な逆台形、②プロ集団が落ち込んだ陥穽、③飛鳥宮には内郭がなかった、④宅地四町の長屋王邸と嶋宮、⑤鳥川を基軸とした空間構造・正殿配置、⑥岡の台地の遺構が示す微妙な歴史の重なり、⑦急ぎ過ぎた結論・嶋宮と飛鳥浄御原宮、

3. 主張： ①明日香村岡の台地には浄御原宮のあるべき場所はない。②世界文化遺産への登録が済んだから、この所在地を本気で探すことが研究者に残された宿題である。

4. 質疑等： ①律令宮殿かどうかは定義ではなく実例によって決める。②「倭京」は藤原京の下部層ではなく大宰府や難波宮を指す可能性もあるか。③蘇我氏の拠点・島の庄と嶋の宮の関係。④「倭の五王」の宮殿地は不明のまま、などがありました。

5. 感想： ①事前に用意された動画映像が使えないため、説明に苦労される様子が伺えました。②説明の趣旨と内容はよく理解でき、この問題に関する強い熱意が感じられました。③今後も続編の発表を期待します。(発表70分、質30分)

【懇談会】 会場参加の倉沢さんが「皇室・皇位をめぐる議論に関する研究成果の尊重を求める古代史研者の会の声明」を配布・紹介されました。これは今回の皇室典範改正に際して、「皇位の男系継承は2600年以上にわたって先人たちが守りぬいてきた皇室の伝承」との政治的な発言に対して、訂正と反省を強く求めるものです。会場から「古代史関係でもこのような行動を起こす研究者グループはいないのか？」の声がありました。なお、この声明文はインターネットでの閲覧も可能です。(5分)

第二部 【勉強会と読書会】

新保 高之氏

(1) 【勉強会】 題名：「古田武彦著作集」から『邪馬壹国の論理』 その3

1. 履修対象：第二編の第三章【邪馬壹国の諸問題】・第四章【魏晉(西晋)朝短理の史料批判】

2. 履修内容：①第三章は尾崎雄一郎氏の「邪馬壹国について」と牧健二氏の「古田武彦氏の『邪馬壹国』について」への再批判、第四章は山尾幸久の『魏志倭人伝』に対する批判 ②各章を構成する全節から要点を抽出した説明と解説がありました。なお、尾崎先生と牧先生の専門はそれぞれ、「中国語音韻学」と「日本の法制史学」、山尾先生の専門は「日本古代史」です。

3. 重要事項・質疑等：

①古田氏はこれら先生に対して皮肉を交えた辛口の反論をされています。

②なお、前回対象とした「榎先生の反論」を掲載した読売新聞の記事は、73年5月29日～6月16日の夕刊に掲載されていました(補足説明等)。

③意見として、「古田氏が自説を変えた際の説明が不十分」、「外国語の音韻表記は一般に一致しない」、等がありました。(解説・質疑40分)

(2) 【読書会】 「清寧天皇紀その4」

1. 対 象：「仁賢天皇紀」即位前記及び元年～十一年条と②三天皇紀に関する補注10件の再掲

2. 主要記事と特徴：

元年「億計天皇即位」・二年「皇后が自死」・六年「日鷹吉士の高麗派遣、飽田女の嘆き」・十一年「天皇崩御・埋葬、などでした。特徴としては、顕宗紀とは記事構成が大違いなことでした。

3. 説明の内容：「仁賢天皇紀」全体の原文記事・頁注釈・補注と現代語訳を例示、及び②巻15する「補注」の特徴等の説明でした。

4. 質 疑 等： ①「難波小野皇后自死」の動機に説得力なし。②夫が高麗に赴いた「飽田女の嘆き説話」の挿入意図が不可解、など。③「補注」から、この三天皇紀の中心は「顕宗紀」である、等でした。(解説・質疑25分)